

シニアの I C T 利用に関するライフスタイル・アプローチ (1)
シニアの「日々の活動」と「人間関係」による類型化の試み

飽戸 弘 (東京大学名誉教授)

栗原 一浩 吉良文夫 松本健太郎 栗原俊介 水野一成

(株) N T T ドコモ モバイル社会研究所

1. 研究背景

1 研究背景

■ 研究背景

高齢化率が26.7%（2015）となり、超高齢社会がもたらす社会的課題はさらに深刻化。



出展：総務省統計局

元気で知恵やノウハウを豊富に有している「アクティブシニア」が今後、多く存在。

これらシニア世代の生活をより豊かにするために

“必要とされること”、“ICTが貢献し得ること”を検討する。



2. 研究・調査概要

2-1 研究概要

定量調査を実施し、シニアのライフスタイルを軸に分類。その後、シニアのタイプ別に最適なICT活用の指針を提案。

STEP 1 (定量調査) 『シニアの生活実態調査』

[日々の生活]、[ICT利用による人間関係への影響]に着目した構造分析
：シニアのICT利用に関するライフ・スタイルアプローチ(1)(2)

[仕事] [趣味] [ICTサービス][スマホの関与][心理]等に着目した構造分析

シニアの
ライフスタイルを軸
とした分類

シニアにも様々なタイプが存在



STEP 2 (定性調査・フィールドワーク等)

ICTの普及できていない障壁をあぶり出す

様々なシニアのタイプに応じた
最適なICT活用の指針を提案

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 1) 名称 | シニアの生活実態調査 |
| 2) 調査実施時期 | 2015年10月～11月 |
| 3) 調査方法 | 訪問留置調査 |
| 4) 調査対象者 | 関東（1都6県）に在住する60歳～79歳の男女 |
| 5) 標本抽出方法 | QUOTA SAMPLING 性別・年齢・居住地で割付 |
| 6) サンプル数 | 530サンプル |

3. 調査分析手法

スケールの設定①

日々の活動

- ・高齢者の生活状況を把握するための調査(湯沢氏：現前橋工科大学)
- ・高齢者の生活実態調査（山田氏：現岡山大学）
- ・各自治体や民間が主催するカルチャースクール を参考に、

地域活動 2 項目

カルチャースクール 2 項目

人との交流 2 項目

オリジナルの

シニアの日々の活動スケール

設定

	設 問
地域活動	①自治会・町内会・老人会への参加 ②奉仕活動・ボランティア活動への参加
カルチャースクール	③教養・芸術・料理などのカルチャースクールへの参加 ④体操・ヨガ・ダンスなどのカルチャースクールへの参加
人との交流	⑤仲間・友達との交流 ⑥家族・親戚との交流

スケールの設定②

ICT利用による人間関係への影響

・飽戸がおこなったライフスタイル研究で使用した

人間関係の拡大・深化4項目・・・

①②③⑤

・新たに

人間関係の深化の1項目・・・④

人間関係の悪影響の1項目・・・⑥

オリジナルの

シニアに関するICT利用による人間関係スケール

設定

	設 問
拡大	①新しい友だちができた ②交際範囲が広がった ③旧友との交流が復活した
深化	④家族との交流が密になった ⑤知人・友人との交流が密になった
悪影響	⑥人間関係に悪影響が出た

3-3 分析工程・手法

「日々の活動」と「ICT利用による人間関係への影響」をそれぞれ因子・クラスタ分析を行う。
その後、それぞれのクラスタの相関をみる。

分析項目

日々の活動

ICT利用による人間関係への影響

因子分析

因子分析

分析
手法

クラスタ分析 (※)

クラスタ分析 (※)

それぞれのクラスタの相関

※クラスタごとの社会的分布については第2部で説明

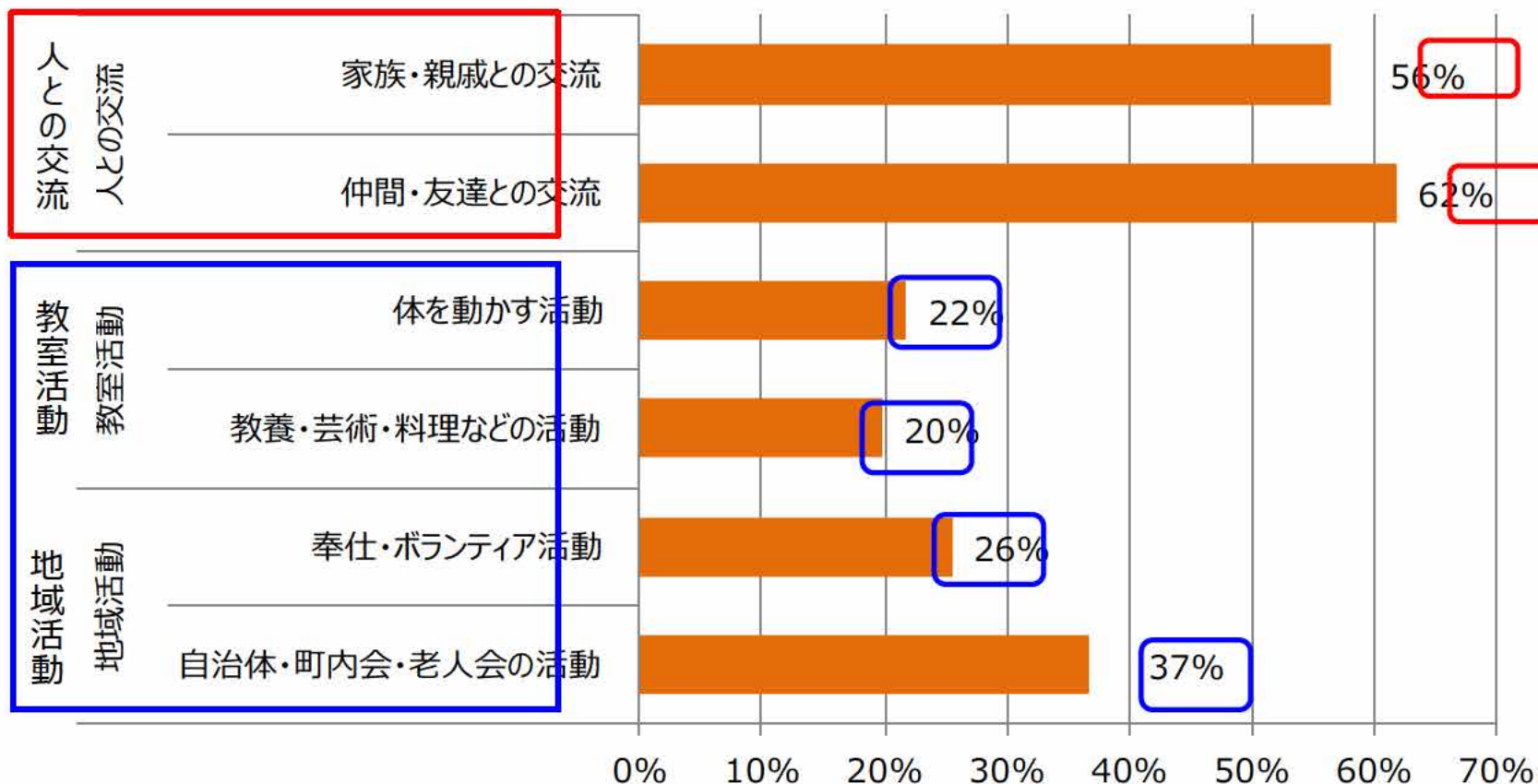
4. 日々の活動に関する調査結果

4-1 日々の活動の調査結果

■ 調査結果①「日々の活動」

人との交流では半数以上が、地域活動・教室活動でも2割以上が積極的におこなっていると回答→シニア世代のアクティブな日常生活が垣間見える。

・単集計 ※参加している（おこなっている）、ときどき参加している（ときどきおこなっている）と答えた人



4-2 日々の活動調査結果 因子分析

調査結果 「日々の活動」

因子分析の結果、仮説通り「地域組織に参加」「教室に参加」「仲間・家族との交流」の3つの因子が抽出される。

・因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子
	地域組織に参加	教室に参加	仲間・家族との交流
自治会・町内会・老人会の活動	0.69	0.19	0.10
奉仕・ボランティア活動	0.66	0.05	0.09
教養・芸術・料理などの教室	0.15	0.70	0.14
体を動かす教室	0.07	0.57	0.12
仲間・友達との交流	0.14	0.25	0.56
家族・親戚との交流	0.05	0.05	0.54

(因子抽出法：主因子法、回転方法：バリマックス回転)

4-3 日々の活動調査結果 クラスタ分析

調査結果 「日々の活動」

クラスタ分析の結果、「地域で活躍」「仲間・家族中心」「消極派」「教室で生き生き」の4つのクラスタに分けられた。

・クラスタ分析結果

		S1:地域で活躍	S2:仲間・家族中心	S3:消極派	S4:教室で生き生き
n		66	259	130	59
人数構成比		12.8%	50.4%	25.3%	11.5%
因子	地域組織に参加	1.4	-0.3	-0.2	0.1
	教室に参加	-0.1	-0.2	-0.3	1.7
	仲間・家族との交流	0.4	0.3	-0.9	0.4

(クラスタ化の方法：K-means法)

5. ICTの利用による人間関係への 影響に関する調査結果

5-1 ICTの利用による人間関係への影響 調査結果

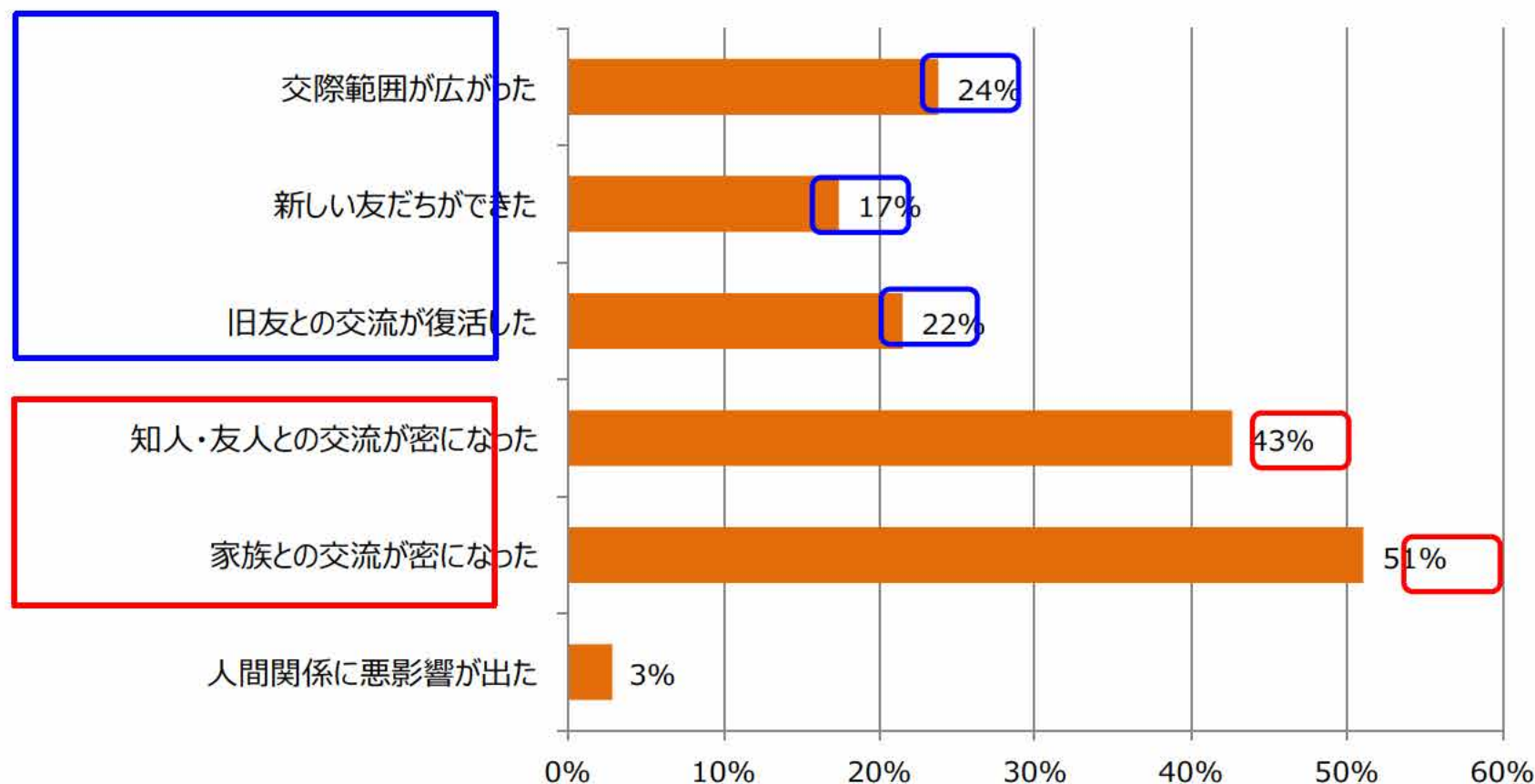
■ 調査結果②「ICT（※）の利用による人間関係への影響」

※ここでのICTデバイスはケータイ・スマホ・パソコンを指す

家族や知人・友人との交流が密になった【深化】と答えた人が約半数、
交際範囲が広がった、友人ができた、旧友との交流が復活した【拡大】と答えた人が約2割回答→シニアにおいても、一定のICT利用による人間関係の深化・拡大が認められた。

・単集計

※そう思う・ややそう思うと答えた人



5-2 ICTの利用による人間関係への影響 因子分析結果

調査結果 「ICTの利用による人間関係への影響」

因子分析の結果、「広がり」「深化」「新しい友だち」の3つの因子が抽出される。

・因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子
	広がり	深化	新しい友だち
交際範囲が広がった	0.79	0.26	0.26
新しい友達ができた	0.6	0.28	0.46
旧友との交流が復活した	0.48	0.29	-0.05
知人・友人との交流が密になった	0.45	0.62	-0.19
家族との交流が密になった	0.2	0.6	-0.04
人間関係に悪影響が出た	0.14	-0.03	0.12

(因子抽出法：主因子法、回転方法：バリマックス回転)

5-3 ICTの利用による人間関係への影響 クラスタ分析結果

調査結果 「ICTの利用による人間関係への影響」

クラスタ分析の結果、「消極型」「深化型」「広がり型」「双方型」の4つのクラスタに分けられた。人間関係への拡大・深化の影響がある人は5割弱であった。

・クラスタ分析結果

ICT利用により人間関係に「拡大」「深化」

ない：5割強

ある：5割弱

		S1:消極型	S2:深化型	S3:広がり型	S4:双方型
n		242	101	41	61
人数構成比		54.4%	22.7%	9.2%	13.7%
因子	広がり	-0.5	-0.3	1.2	1.6
	深化	-0.6	0.7	0.2	0.8
	新しい友達	0.1	-0.8	-0.4	0.9

(クラスタ化の方法：K-means法)

6 . 考察

6-1 日々の活動クラスタと人間関係クラスタの相互の関係

「地域で活躍」「双方型」
 「教室でいきいき」「広がり型」
 「仲間・家族中心」「深化型」

日々の活動が**活発** ICT利用による人間関係への影響を**肯定的**

「消極派」「消極型」

日々の活動が**消極** ICT利用による人間関係への影響を**否定的**

		人間関係クラスタ				合計
		双方型	広がり型	深化型	消極型	
日々の活動	地域で活躍	25.8%	9.7%	19.4%	45.2%	100%
	教室でいきいき	22.0%	16.0%	18.0%	44.0%	100%
	仲間家族中心	12.4%	7.1%	28.4%	52.0%	100%
	消極派	5.2%	8.3%	15.6%	70.8%	100%
	平均	13.9%	8.8%	23.1%	54.3%	100%

■ 考察

【先行研究より】

孤立防止

主体的な社会参加

高齢者の I C T の利用は、孤立リスクの高い高齢者のコミュニケーションを実現するツールとなるだけでなく、中高年の主体的な社会参加の武器となりうる。

【本研究結果より】

日々の活動と I C T 利用による人間関係への影響に相関

日々の活動が積極的な人は、I C T 利用の人間関係への深化・拡大の影響が高い。その一方で、日々の活動で消極的なグループも存在し、そのグループは I C T 利用による人間関係への影響も消極型が高い。

■ 今後の研究課題

シニアを一様にみることはできない⇒

様々なシニアのタイプに応じた最適な I C T 活用の指針を検討

※クラスタの社会的分布（性・年齢・I C T 所有等）は第 2 部で報告

シニアの I C T 利用に関するライフスタイル・アプローチ（1）
— シニアの「日々の活動」と「人間関係」による類型化の試み —

ご静聴ありがとうございました

飽戸 弘 （東京大学名誉教授）

栗原 一浩 吉良文夫 松本健太郎 栗原俊介 ○水野一成

（株）N T T ドコモ モバイル社会研究所